

『シャロット・L・フォートンの日記』

―南北戦争時代の白人世界に対する若き黒人女性の反応―について

中 村 紘 一

(1)

一八五七年の独立記念日、もうすぐ二十歳になろうとする一人のアメリカ娘は、その日のことを次のように日記に書いた。

七月四日土曜日。この日の祝賀だって！ 何という笑い草かしら！ 私の心はうんざりする。昔と較べると人々がそのいんちき愛国心の発揚にうんと控え目になっているのを見て嬉しくなる。^① ……

彼女は翌々年一八五九年の独立記念日にも、同じような感想を書きつける。

七月五日月曜日。：午後と夕方を休息しようとして過ごしたが、無駄であった。愛国心に溢れたアメリカの若者たちが自分たちの栄光の記念日を祝うためにものすごく騒ぎ続けたために休息など不可能だった。私の心はこんな笑い草にはうんざり。一日中、私は、わが国で最も高貴で善良で雄弁な人たちが偽善に反対する自分たちの証言を述べているフラミンガムのあの楽しい木立のことを何べんも考えた。本当にそこへ行きたかった。

アメリカが独立を達成してまだ百年も経過しないのに、それに対する呪詛とでも言うべきこのような批判が国民の中から（しかも、まだうら若き女性から）、出て来たのだから、もしかの錚錚たるたる建国の父祖たちが生きていたならば眼を剝いて驚いたに違いない。独立記念日の祝賀など「いんちき愛国心の発揚」にすぎないと書きつけるこの女性―随分過激でややもするとその存在をわれわれは信じかねるのであるが、彼女が黒人女性であったと知るならば、ある程度納得がいくのではないか。ある程度というのは、当時、独立記念日の祝賀を「いんちき愛国心の発揚」、そして、「偽善」と、きめつけた彼女の意識は、やはり信じられないくらい高い（？）ものと想像されるからである。ここで、当時とは南北戦争前、多くのアメリカ黒人がまだ奴隷であった時のことである。彼女の名はシャーロット・L・フォートン (Charlotte L. Forten, 1838 - 1914) と書いた。

(2)

『シャーロット・L・フォートンの日記』The Journal of Charlotte L. Forten (ノートン紙製版一九八一)の編

者であるレイ・アレン・ピリングトンによれば、彼女が右の日記をつけ始めたのは南北戦争が勃発する七年前の一八五四年五月二十四日十六歳の時で、その後一八六四年五月十五日まで南北戦争中を含めて約十年間、途中休むこともあったが、書き続けた。彼女の日記の特徴は、編者のピリングトンが副題としてるように、一口にいうと、「南北戦争時代の白人世界に対する若き黒人女性の反応」という点にあった。そのことは、独立記念日について彼女が記している批判にも十分窺うことができる。それにしても、繰り返す言えば、彼女の批判は相当厳しく、また彼女の意識は黒人としては、そして、女性としては、信じられぬくらい高い。彼女はいったい何者であったのか。以下、主としてピリングトンに沿って彼女の家系を辿ってみることにする。

シャーロット・L・フォートンは一八三八年八月十七日フィラデルフィアに生まれた。父はロバート・ブリッジズ・フォートン、(Robert Bridges Forten)、母は彼女がまだ幼い時に亡くなっていた。父の職業は家業の縫帆工で、これは祖父のジェイムズ・フォートン (James Forten) から受け継いだものだった。もちろん、当時ペンシルヴァニア州は奴隷州でなかったが、フォートン家がこのように手広く商売をして中産階級の黒人自由民の地位を保つことができたのはこの祖父ジェイムズの手腕と人徳によるものだった。

そのジェイムズ・フォートンは、一七七六年自由黒人の両親のもとに生まれ、断片的な学校教育も受け、独立戦争ではフィラデルフィア私掠船の少年火薬運搬手として志願した。しかし、戦争が終って国の独立が達成された時、その独立のために戦った彼は一つの疑問を抱くようになった。すなわち、すべて人間は平等であると宣言した国がなぜ黒い肌の人間だけを二流市民にしたのか、という疑問であった。そこで、彼は、肌の色よりも人格によって人は判断されると言われた英国に渡り、熱心にグランヴィル・シャープ (Granville Sharp) らの奴隷制廃止論者の声に耳を傾けた結果、自らも終生変らぬ奴隷制廃止論者になることを誓った。

「彼は、実業界での地位の梯子を登って行くにつれて、この国で最も評判の悪い改善運動―つまり、奴隷制廃止運動にますます意を尽すようになった」と、ピリングトンは書いている。それは、一八〇〇年、「一七九三年逃亡奴隷法」修正のための国会請願に署名、一八一三年、ペンシルヴァニア州議会が自由黒人の入州禁止法を通そうとしたことに対する激しい攻撃、そして、一八一七年以降は、「アメリカ植民協コロニヤイシヤン・ソサエティ会」の誤った方針（アメリカ黒人をアフリカのリベリアに移住させようとするもの）に対する根強い反対運動、等の彼の行為によく表われている。

一八三〇年代に入ってから、ジェームズ・フォートンは奴隷制廃止運動をますます促進させるが、それと同時に黒人白人併せて四十人が働く縫帆工場を経営し、広い家には妻と八人の子供たちや親戚が住み、「時には、二十二人以上がいっしょに食卓についた」こともあったという。そして、その一方では「二世代に渡って、フォートン家のフィラデルフィアの屋敷は奴隷制廃止論者たちのメッカであった」ともいう。一八四二年七十六歳で彼が亡くなった時には、その葬儀は市の歴史始まって以来の大きなものの一つであり、数千人の黒人と数百人の白人がその葬列に加わったと伝えられている。

ジェームズ・フォートンの残された子供たちのうち、シャロットの性格を形成するに特に影響を与えたのは、彼女の父ロバート・ブリッジズ・フォートンと叔父のロバート・パーヴィス (Robert Purvis) であった。父は縫帆の仕事とともに、フォートン家の遺産とでも言うべき奴隷制廃止運動を受け継いだ。やがて、南北戦争が勃発すると第四十三黒人連隊に志願したが、はかなくも、戦病死する。彼の遺体は黒人としては合衆国史上始めて軍葬の礼をもって埋葬されたという。一方富裕だった叔父のパーヴィスは、とりわけ、当時カナダへ逃れようとする逃亡奴隷を援助することで奴隷制廃止運動に貢献し、「地アプリーグラウンド・レイルロード下鉄道の父」と呼ばれた。

こういう父や叔父のもとで幼少期を過ごしたシャーロットは毎日朝から晩まで、急進的ラディカルな奴隷制廃止運動の議論を耳にするというような生活を送った。彼女の教育は、フィラデルフィアの白人学校に入学を拒否されたために、もっぱら家庭教師に依ってはいしたが、一八五四年彼女が十七歳の時、父は彼女にも学校の仲間の必要なことを悟って、マサチュセッツ州セイレムの学校へ送ることにする。セイレムの学校は人種差別がないという理由のためであった。

『シャーロット・L・フォートンの日記』はこの時から書き始められることになる。

(3)

ところが、その日記を書き始めた途端、そして、(人間の自由と平等ということではもっとも進んだ地と考えられていた)マサチュセッツに身を落ちつけたばかりの彼女に、一つの事件が持ち上る。それは彼女の身には直接の関係はないとは言え、今まで彼女の中に育まれてきた意識においては、切実極まりないものであった。

一八五四年五月二十五日木曜日。今夜は書く積りはなかったのに、記録しておかねばならぬことを耳にしました。——それは、自由と慈愛を具えた人の心には必ずやこのうえなく深い憤りと悲しみの感情を引き起こさずにはおかない。逃亡奴隷がまた逮捕されたのである。かわいそうに、たった二カ月の間、「古オールド・ベイ・ステイツ 湾 州」(訳注、マサチュセッツ州の愛称)の土を踏み、空気を吸っただけで、州都の路上でまるで犯罪者のように逮捕され、今では厳しい警護のもとに置かれている。——警察力は二倍に強化され、軍隊は出動態勢にある。それもこれも、神が自

らの形の似せて創り給うた人間が他の人間同様自分にも与えられているあの自由を取り戻そうとするのを妨げるためにとられた処置なのだ。彼を死よりもひどい奴隷の身分に送り返したりして、ボストンが汚名を重ねることのないように願ひ、心から祈るばかりである。できれば、彼を逮捕したという汚名を雪いで欲しい。：

この逃亡奴隷は、名をアンソニー・バーンズ (Anthony Burns) と言ひ、ヴァージニア州リッチモンドから逃れて来たのであった。彼の裁判の日には、群衆はその釈放を求めてボストンの街を練り歩いたという。が、もちろん、その要求が聞き入れられることはなかった。

七月二日金曜日。私たちの最も心配していたことが現実化した。哀れなバーンズに不利な判決が下され、彼は死よりも何千倍もひどい奴隷の身分に送り返されてしまった。救済の企てすら全く不可能だった。囚人は、銃剣を付けた兵士たちに完全に包囲され、大砲には弾が詰められてわずかな動きに対しても発砲の用意がされていた。今日、マサチューセッツ州は汚名を重ねて、奴隷制勢力に屈したのである。ああ、あの哀れな人が再び奴隷制の恐怖に身を委ねる時、私たちは間違ひなく彼の運命となるものを、何という深い悲しみで思うことか！ 臆病にも何千人という兵士を集めて、奴隷所有者の要求を満足させ、神の姿に似せて創られその唯一の欠点は肌の色が黒いという人間から自由を奪ったあの政府を、私たちは何という軽蔑の眼で見なければならぬことか！ だが、もしこの非道に対して抵抗がなされるなら、この兵士たちはアメリカ市民を容赦なく射殺しようとする。それも世界中で最も自由であることを誇りとしている政府の特別な命令で。そのうえ、一七七六年独立革命が始まった、まさしくその土地で。その戦場の見える所で、何千人もの勇敢な男たちが英国の専

制に反対して戦い死んだのであるが、その英国の専制も今日のアメリカ人が行なう虐待に較べると取るに足らぬものであった。：雲が私の上に、私たちの迫害された人種すべての上に、垂れ籠めて、それを払い除けることのできるものは何もないように思われる。

この事件は、彼女と彼女の家族たちが、取り憑かれたように意識してやまなかった奴隷制の不正に対する、そして、それを維持しようとする政府に対する、憤りと悲しみとを、(ボストンの地においてすら、)彼女に味わせるに十分なものであった。そうであればこそ、冒頭に引用した独立記念日に対する彼女の呪詛も決して突飛な感情の吐露でないことが納得されるのである。

(4)

シャーロットは、垂れ籠めた雲を払い除けることはできないと悲観的な言葉でその日の日記を終えてはいるが、だからといって、絶望してしまっただけでは断じてない。彼女にはやらねばならぬことがあった。

彼女の学校生活(一八五四年から五五年のヒギンソン中等学校グラマー・スクールと五五年から五六年のセイレム師範学校ノーマル・スクール)において見られる最も特徴的なことがらは、その猛烈な勉強ぶりである。その結果、中等学校卒業の時には、彼女作詩の、賞を獲得した「別れの歌」バイキング・グレイムが、聴衆の前で唱われた。「彼女の細かく整った目鼻だち、よく発達した額、知性の光を放った表情、そして、彼女が虐げられ傷つけられた人種であることを示す黒い顔色、これらが一つになってその場面を最も興奮させたのであった。聴衆はアメリカで最も貴族的な町の最も貴族的な人たちから成り

立っていた。その人たちの心に与えた印象は、このように立派に表彰を受けた人種のためにはすばらしいものであった^④という。師範学校についても彼女は「輝かしい成績」で卒業している。

ビルングトンは、彼女の、このような輝かしい結果をうむことになった勉強ぶりは、決して利己的なものでなく、彼女は「優れた教養を具えた黒人が人種の平等を示す生きた証拠であることを痛切に意識し、また、黒い肌が誰にも劣らない知性を秘めうることを証明しなければならぬ^⑤」かったためであると述べている。事実、彼女自身も、先のバーンズ逃亡奴隷事件の直後、「最近の出来事のために勉強を再開する喜びも大きな翳りを受けるであろうが、しかしその出来事が新たな刺激となりもっと真面目に勉強することによって、聖なる目的のために働き、虐げられ苦しむ私の人種の条件を変えるために大いに貢献できるに相応しい人間に私になれるよう役立てたい」(一八五四年六月四日)と記しているし、また、そのためには、教師志望を彼女は(そして、彼女の父も)早くから決めてもいた。「父が私に望んでいるものになるために、また、責任ある教職の義務を果たす準備をするために、そして虐げられ苦しむ私の同胞に対して役立てるような生活をするために、私は努力を惜しまない」(一八五四年十月二十三日)と彼女は記しているのである。

シャロット・フォートンの学校時代の(いや、その猛烈な勉強ぶりを含めて、単に学校時代だけでなく、その後セイレムで教職に就いてからの生活にも見られる)もう一つの特徴は、この地で頻繁に行なわれた講演に熱心に出席していることである。彼女の日記は毎日のようにそれを記している。すでに、「マサチューセッツ州奴隷制反対協会」^{Anti-Slavery Convention}に入会していた彼女のことであるから、もちろん、出かけて行く講演は当時奴隷制廃止論者として名を馳せていた人たちが行なうものであった。すなわち、ウィリアム・ロイド・ガリソン (William Lloyd Garrison) / ウェンデル・フィリップス (Wendell Phillips) / ジョン・G・ホイティアイ (John G. Whittier)

等々といった人たちによるものであり、彼女が足を運んだ講演場所もセイレムのみならず、ポストン、フラミ
ンガム、ダンヴァーズにまで及んだ。加えて、「婦人奴隸制反対協会」の主催する裁縫サークルや
慈善市にも彼女は積極的に参加している。また、奴隸制廃止運動に直接関係のない、例えば、哲学者のR・W・
エマソンの講演などにも出かけてはいるが、急進的奴隸制廃止論者による講演には、興奮してしばしば最上級の
褒め言葉で感想を綴っているのに反して、「エマソンは」ちょっと変わった顔つきの人」と、どこことなくひややか
な印象をもらしている。

(5)

このようにして、セイレムでの学校生活とその後の教師生活は、彼女の二つの目的——知的向上と奴隸制廃止運
動を達成するために全力を尽して捧げられたのである。そのためには、ニューイングランドのこの地は（そして、
ポストンも）、貴族的な面を具えると同時に急進的奴隸制廃止論者の知識人がたむろするところでもあったか
ら、彼女にとっては、自分の生地であるフィラデルフィアなどと較べるとはるかにうってつけで居心地のよい場
所であったに違いないし、事実、そのような感想を彼女はしばしばもらしている。

もっとも、彼女はバーンス事件ではポストンに失望することがあったように、差別のないことがタテマエのセ
イレムの学校生活でも、次のような経験をするにはあった。

〔一八五五年〕 九月十二日水曜日。今日学校が始まった。…私は黒人がみんな人間嫌いではないかしらと思

う。間違いない、人を憎むようになる理由が私たち〔黒人〕には揃っている。教室で〔白人の〕同級生に会う〔一〕彼女たちは私に対して申し分なくやさしく暖かい―が、おそらく翌日、路上で彼女たちに会ったとすると、彼女たちは私の知り合いであることを恐れる。私にはこのような人たちを、―そんな卑劣なことはできない人だと信じてかつては愛したことがある人たちを、今では軽蔑と冷笑をもって見ざるをえない。他の人たちも、できるだけ人目につかないような会釈をするだけである。―私がもちろんそんな会釈に対しては全然知らんぷりをしていると、間もなくそれは完全に消滅してしまう。なるほどこんなことは、私たちが国民として耐えねばならない大きい公的な不当行為に較べると、些細なことではある。でも、それを経験したものにとっては、この表面上は些細なことが非常に神経にさわり意気阻喪させる。子供心にさえも、それは大きな欺瞞と冷酷を頭にし、早くから猜疑心と不信を教え込む。侮辱には侮辱で、憎悪には憎悪で対抗し、白い肌の人には誰も―見かけは、いかに愛すべき、魅力ある、そして気の合った人でも、明々白々な理由により愛しても信じてもらえないと思いつつ、人生を送らねばならないとは、ああ、何とつらいことか！ 私の魂の憎悪に満ちた激しい感情の中で、繰り返し繰り返し疑問が起る。「いつ、ああ、いつこんなことはお仕舞いになるのかしら？」「どうしようもないのだろうか？」「どのくらい、ああ！ どのくらい私たちは苦しみ―耐え続けなければならぬのか？」

セイルムの地においてでさえ、彼女の魂はほとんど絶望の淵に沈もうとしていることが、ここではよく判る。しかし、彼女は本当に絶望したのではない。絶望して自暴自棄になることなどおよそ彼女には無縁のことであった。それに、十七歳という年齢は絶望するにはあまりにも若すぎたのかも知れない。彼女はその後すぐに敢然と

書き継ぐ。

絶望することは間違っていて、恥ずべきことであると良心は答える。知識を獲得し、偏見と迫害の障害を打破するために真剣に誠実に努力しよう。勇気を持って絶え間なく勉強しよう。もし私たちには無理であったなら次の世代には、よりよい日が、より明るい日が、待ち受けていることを願ひ、信じよう。―その時には、奴隸制と偏見は自由と真実の榮えある光の前に消滅するだろう。すべての黒人の権利はどこでも認められ尊敬され、黒人は「対等の人間」として遇されるであろう！

この時の彼女には、やがて六年後に南北戦争が勃発し、八年後（一八六三年）の一月には奴隸解放宣言が行なわれるのを予想しえたことであろうか。いずれにしても、彼女は先に述べた二つの目的を遂行するために勇気を持って努力するのであるが、結局、健康を害して（結核である）セイレムを去らねばならなくなる。一八五八年三月、地元『セイレム・レジスター』紙は惜別の念をこめて彼女の辞任を伝えている。

シャーロット・L・フォートン嬢が健康上の理由で当市イープス中グラマー・スクール等学校助教諭を余儀なく辞任されたのを知り、われわれは誠に残念である。彼女は、この一兩年の間、自らは大いなる名誉となり、学校には有用な人として勤めてこられた。フォートン嬢は黒人の若き婦人で、あの憎悪された人種に属しているが、わが国民によるその虐待は、キリスト教徒の国民であると標榜するわれわれに対する強い非難の的となっている。…彼女の勤務は校長と教育委員会に対して十全の満足を与え、両者から惜しみない称讃を勝ち得た。われわれの公

立学校における教師としてのこの婦人の成功例をここに記録することができると喜びとする。…なお、フォートン嬢は今後はフィラデルフィアに在住の予定^o。

(6)

フィラデルフィアに帰ったシャーロット・フォートンは徐々に健康の回復するのを待った。やがて働けるようになる、最初はフィラデルフィアで、そして、一八六〇、六一年には再びセイレムに戻って、教職に就く。この間彼女の日記が途切れることはあった。

一八六二年六月二十二日、セイレムにて。長い間ほったらかしておいた旧友の日記よ、後悔極まりない気持ちで、私は再びおまえのもとに戻る。この前おまえに話してから二年以上も経ってしまった—変化でいっばいの二年間だったのに。

この後、彼女はこの日記に対して「親愛なるA」と呼びかけること、そして、空白であった二年間の自分の健康状態や勉強ぶりなど主として身辺の雑事を記している。

ところで、ピリングトンは、彼女に日記を再開させるようになった理由は南北戦争勃発のためであるとしているが、それにしても、そのことについて彼女が感想めいたものを何も書いてないのは不思議である。これは推測の域を出ないことであるが、なるほど、ピリントンが言うように、間接的には、戦争勃発で世の中が騒然となり、

それに刺激されて彼女は再び筆を執るようになったとも考えられるが、しかし、彼女にはこの戦争自体に直接的には関心がなかったのではあるまいか。少くとも戦争勃発当初においては、そう思われるのである。というのも、歴史が教えるように、南北戦争は、最初は奴隷解放のための戦争などではなく、あくまで、連邦側にとっては「分たれた家」は立たない、つまり、南部同盟の分離^{セセッション}を阻止しようというためのものであり、南部同盟にとっては自らの独立を勝ちとろうとするための戦争であったからである。シャールロット・フォートンにとって切実な問題である奴隷解放宣言が行なわれたのは、戦争もかなり進んで一八六三年になってからのことである。

とはいえ、やがて彼女らしい方法でやはり、戦争にかかわって行く。一八六二年八月九日の日記には、「ホイティア（訳注、既出のジョン・G・ホイティア、一八〇七—一八九）がポストンの『ポート・ロイヤル委員会』に志願するよう私に助言された。あの方は私が「ポート・ロイヤル」に行くことを非常に望んでおられる。私はきつと助言に従うであろう」と記している。ここで、ポート・ロイヤルというのは、サウス・カロライナ州南部にある島のことで、この島は、当時、連邦軍によって占領されたのであるが、それと同時にそこに住んでいた数千の黒人奴隷が解放された。しかし、新たに自由民になったこれら黒人たちは教育もなく、生活程度も最低だったので、北部の諸州では、奴隷制廃止論者たちがこの新しい自由民たちに物資と教育の機会を与えるための委員会を組織しつつあった。ポストンの「ポート・ロイヤル委員会」もその一つである。シャールロット・フォートンがその委員会を通して、これら黒人自由民のための教師になりたいと申し出ることになるきっかけが、この日のホイティアの助言であった。

しかし、ポストンの委員会は女性であるという理由でその申し出を拒否したために、彼女はフィラデルフィアに戻り、そこでのコネを使って、やっと「フィラデルフィア・ポート・ロイヤル救済協会」の公認派遣員として

一八六二年十月ニューヨークから出帆することができた。

(7)

ポート・ロイヤルのすぐ傍のセント・ヘレナ島が彼女の新しい任地であった。彼女は宿舎に着くと早速その新設されたばかりの学校へ出かける。

十月二十九日水曜日。：

私たちは学校へ行つて、子供たちが読み書きするのを見た。先生方は子供たちが非常に短い間に大変な進歩をしたとおっしゃるし、私は子供たちの多くが明るく勉強に熱心であることに気づいて喜んだ。：かわいい子供たちよ！ 奴隷に生まれたが、ついに解放されたのだ！ 神がおまえたちに自由がもたらすすべての祝福を与え、あらゆる点でおまえたちがそれを享受できるように相応しい人にされますように。私の心はおまえたちに注がれている。私はおまえたちの手助けをするためにできる限りのことを喜んでしよう。――

彼女と同僚たちのここでの任務は、黒人には白人と同じように学び自己改善する能力があることを証明することであった。彼女たちは骨を措きまずあらゆる努力をし、かなりの成果をあげることができた。

一八六三年一月一日という日は、シャロット・フォートンにとって、ポート・ロイヤルでの生活のみならずこれまでの彼女の半生のうちでも、最も輝かしい日であったに違いない。

一八六三年元日本曜日。この国の歴史のうちで最も輝かしい日だった、と私は思う。早起きをして―珍しいこと―早く出発した。古い借り物の馬車と驚くほどゆっくりした馬とで。どこへ行くつもりと、親愛なるA、あなたは訊くでしょう。船乗り場まで行くの。そこからサクストン・キャンプへ、そして、祝賀会へ向かったの。：

彼女のこの日の日記は弾むようなリズムの文体で綿綿と綴られる「今日はありきたりの記録では不可能。とても興奮してたの。輝かしい夢のようだったし、今もそうよ。」船乗り場からキャンプまではフローラ号に乗り、上陸すると、セイレム以来の旧知で彼女の主治医であるロジャーズ医師と、同じくセイレム出身のヒギンソン大佐とに迎えられる。式典は美しい檜の木立の中で行なわれた。青い上衣と緋色のズボンという制服姿の黒人兵たち、そして、子供を含めてさまざまな恰好の見物人たちが「仕合せと熱心さと期待のまなざし」で見つめていた。

式典は従軍牧師のファウラー師の祈りで始まった。もともとギリシャ語の、そして今はパリス島監督官である、ザコス教授がこの日のために作った頌歌を自ら朗読し、その後白人たちがそれを唱った。ヒギンソン大佐は品のよい短い言葉でプリズベイン医師を紹介した。プリズベイン医師は大統領の〔奴隷解放〕宣言を読みあげ、熱狂的な喝采を浴びた。それから、「(ニューヨークの)チーヴァ博士の教会が寄贈した美しい旗が、フレッチャー牧師の熱のこもった見事なスピーチをそえて、連隊のヒギンソン大佐に贈られた。式が終ると直ちに黒人の何人かが、―自発的に―「わが祖国、汝のことを」を唱い始めた。それは感動的で美しい出来事だった。

その後、彼女はロジャーズ医師らとディナーをとにし、ヒギンソン大佐（とても感じがよく、ほとんど家庭的な方）のテントに招かれる。そこで正装閱兵式を見物する。その他さまざま楽しい行事が続いて長い長い一日が終る。

ああ、今日は何と壮大で輝かしい日であったことか。今日がその前触れとなった自由の夜明けは直ちに私たちを訪れることは確かであり、それも希望していたよりも早く訪れるだろうと私は信じる。心はこのうえない喜びで一杯なの。でも日記を閉じる前に、親愛なるAよ、オークランズに戻って来た時にいっしょだった仲間のことを書いておかなくてはならない。フローラ号の船上では本当に楽しかった。リッジー・ハンと私は甲板を散歩し、「ジョン・ブラウン」と、ホイティアの讃歌と、そして「祖国よ、汝のことを」とを唱ったの。頭上には月が輝き、足下では、波が清らかに澄んで、柔い月光の中で輝いていた。ポーフォートでは手漕ぎのボートに乗り、船頭は、私たちを渡してくれる間中唱い続けた。……

自分の使命を着々と果たしつつある中で、奴隷解放宣言の祝賀会に出席し、その夜こうして南国の島で舟遊びに興じる彼女は十分ロマンチックな気分に含まれ、至福の状態にあったと言えよう。

同年の独立記念日の日記は、これまでに見られたこの日に對する呪詛はすっかり影をひそめている。

七月四日土曜日。今日は大変愉快なお祝いをした。大人や子供たちはすべて、バプチスト教会の回りの木立に集まった。古い旗が道路を横切って二本の立派な榎の木の間に掲げられた。その下で子供たちはグループに

なつて、ストーリー・スパンゲルド・ブナー 國 歌を唱つた。—この日のために私たちが教えておいたものだ。ピアス氏、(黒人牧師の)

リンチ師その他の方々の演説があり、子供や大人たちはさらにまた唱つて、「流れ、ヨルダン川」のメロディを木立に響かせた。それから、みんなには糖密水—彼らにとつては大変な贅沢—と堅パンとがふるまわれた。

(8)

このようにして、ポート・ロイヤルでのシャーロット・フォートンの生活は、熱心な同僚に恵まれ、教えるべき純真な黒人の子供たちがおり、しかもその間に、念願の奴隷解放宣言も行われたというわけであるから、充実した日々の連続であり、彼女にとつては文句のつけようがないはずのものであった。それはセイラム時代に勉強に励み、ホイティアを始めとする奴隷制廃止論者の知識人に囲まれて過ごした幸福な生活に較べて優劣のつけ難いものであったに違いない。

しかし、われわれが彼女の日記を読んでいて何となく近づき難く感じるのは、実はその彼女の充実感—自分の言わばタテマエの使命を遂行するために、彼女が行なう努力とその後の彼女のこの満足感、のせいではないかという気がする。手っ取り早く言えば、彼女はちょっとばかり立派すぎるのである。したがって、彼女がセイラム時代において自分が黒人であるために同級生から無視されてその悔しさをヤケクソになって書き付けている部分などを読むとわれわれは何となくホツとした気分になる。そこには、彼女もわれわれと同じく怒ったり泣いたりする一人の弱い人間としての姿を見せているからである。もっとも、そういった愛すべき(?)彼女の姿がポート・ロイヤルの生活においても見られないでもない。

ポート・ロイヤルに着いて二月ほど経ったある日突然、彼女は記している。

十二月十二日金曜日。：

ほとんど誰もが陽気で仕合せそうな顔つきであった。が、私は憂鬱な気分で帰宅した。ベッドに身を投げる
と、ここに来て以来始めて、非常に淋しくなり自分が哀れになった。

ところが、彼女はそのまま淋しさと自己憐愍に浸っていることができないのである。すぐにタテマエが申し
上ってそんな自分を否定しまう。「でも、私は自分に言い聞かせてもっと分別のある気分になり、今ではかなり
元氣を取り戻した。私がここへ来たのは、やさしい同情やその他のことを求めてではなく、働くために、一生懸
命働くために、来たのであることを二度と忘れさせないで下さい。その仕事を忠実にうまくやらせて下さい。」

彼女は着任早々、ソープ氏というポート・ロイヤルの若い監督官の一人と知己になる。彼はロード・アイラン
ド州プロヴィデンス出身でブラウン大学の学生であり、彼女に対してこのうえなくやさしかった。以来、二人は
忙しい中にも暇を見つけて楽しいひとときを過ごすことがあった。一年半後の日記には、彼女は次のように記し
ている。

（一八六三年）五月十八日月曜日。学校が終ってからソープ氏のところにリジーと馬で行った。：帰りには
ソープ氏が私たちといっしょだった。真暗闇だった。私は立派で元氣のよい、ソープ氏の駿馬に乗った。摺っ
ておれないくらいだった。でもとても楽しかった。私はソープ氏が好きである。噂によれば、あの人も私に対

して好き以上の感情を抱いていらっしやるとのこと。でも、私にはそうではないことが判っている。そんなふうに考えるいささかの理由ももったことがない。あの人はやさしく心の広い方ではあるが、やはり、アメリカ人であるから、人権を剝奪された人種の間を恋するなんて気違いじみたことをもちろんされるはずがない。その噂は、他の多くの噂と同じく、全く馬鹿げていて、いささかの根拠もない。：

ここで、彼女がさりげなく書いていることからは、実は彼女の日記の中で最も悲しい部分であるという気がする。彼女は分別を持ってソープ氏との関係を否定しているが、その分別がゆえにわれわれにはいっそう彼女が哀れに見えてくるのである。アメリカ人であるところの白人と、(奴隷解放宣言の後でも)アメリカ人として認められてはいない黒人、という不法な現状を自分に言い聞かせる時の彼女の分別―それはそれでこのうえなく哀れであることはいうまでもない。

ところが、それに加えて、その哀れさをいっそう募らせる情況が彼女にはなかったか。というのも、先に引用した、彼女がポート・ロイヤルで始めて味った淋しさの感情には、ニューイングランドに対する郷愁がきつとあったに違いないのである。その郷愁とは、そこに住まう人たちに対するものである。例えば彼女が敬愛してやまない奴隷制廃止論者のホイティア、学校時代の校長シェパードに対する懐しさ。そう言えば、ポート・ロイヤルで時々会って楽しいひとときをともに過ごしてきたヒキンソン大佐、ロジャーズ医師^⑧、そして問題のソープ氏もみなニューイングランド出身で、奴隷制廃止論者の知識人で、しかも白人であった。彼女が教師としてポート・ロイヤルで働くことを勧めたのは他ならぬホイティアであった。なるほど彼女にとって、ポート・ロイヤルには解放された黒人の子供たちが生徒として(つまり彼女の生きがいとして)存在したが、彼女が彼らを

教えたのはわずか二年にも満たない期間にすぎない。故郷のフィラデルフィアには彼女の（黒人の）親類縁者が何人もいたが、なぜか彼女はフィラデルフィアを好まない。

結局のところ、彼女の知的精神的拠り所は、あくまでもセイレムを中心とするニューイングランドと、そこで
の知識人（奴隷制廃止論者で主として白人）との付き合いの中にあつた、と言えよう。もちろん、彼らが彼女に
黒い肌をいやおうなく意識させるようなことはなかった。それゆえ、彼女は、そこでその知識人たちが行なう奴
隷制廃止運動やその他の活動に興奮して、我を（時には自分の黒い肌を）忘れることもあつたのではないか。

そうであるからこそ、ソープ氏との関係において本当の自分（自分の黒い肌）に気づいて、彼女が分別を見せ
る時には、われわれには二重の哀れさを誘うのである。

(9)

一八六四年五月、彼女は無事任務を終えてポート・ロイヤルを去る。故郷のフィラデルフィアにいったん帰つ
た後、すぐに、彼女としては片時として忘れることのできなかつたニューイングランドに出かける。そこで懐し
いシェパード校長、詩人のホイティアに再会している。その後は結局十年有余をフィラデルフィアで過ごすこと
になるが、一八七八年十二月、彼女は（四十歳で）結婚する。相手の男性はフランシス・J・グリムケという
白黒混血で、プリンストン大学神学部を卒業したばかりのインテリだった。彼はシャーロットと結婚すると、フ
ロリダやワシントンで牧師を務めた。後に「黒いピューリタン」と呼ばれたように、彼もまた黒人の権利獲得の
ためには、そして、偏見に対しては断固戦う、妥協を許さぬ闘士だった。「シャーロット・フォートンは、フラ

ンシス・グリムケに理想の夫を見つけた。共通の社会的見解と文学的興味を持って二人は牧歌的人生を過ごした^⑧とピリングトンは書いている。一九一四年七月二十三日、彼女は持病のために一年余りの間寝こんだ後、七十六年に近いその生涯を閉じている。

註

- ① Ray Allen Billington ed., *The Journal of Charlotte L. Forten-A Young Black Woman's Reactions to the White World of the Civil War Era* (The Dryden Press 1953, Norton Paperback 1981), p. 101. 以下日記からの引用は日付を見れば判るので註を省略する。
- ② ここでは、記念祝賀とは別に奴隷制廃止論者たちによる集会が行われていた。なお傍点の部分は原文ではイタリックス。以下同様。
- ③ Billington, *Op. Cit.*, p. 13.
- ④ *Ibid.*, p. 24.
- ⑤ *Ibid.*, p. 23.
- ⑥ これは一八五五年三月十四日エマソンの「フランスについて」と題した講演に対する感想。しかし、翌年二月十一日「ソフォドスの『仕事と日々』」と題して時間の貴重さについて講演した時のエマソンには、彼女は最上級の言葉で褒めらる。
- ⑦ Billington, *Op. Cit.*, p. 26. からの孫引きである。
- ⑧ ヒキンソン大佐、ロジャーズ医師と彼女の関係については Edmund Wilson, *Patriotic Core: Studies in the Literature of the American Civil War* (Oxford U. P., 1962) に詳しい。
- ⑨ Billington, *Op. Cit.*, p. 39.